

ニヒリズムの蔓延を食い止めよ

3度の洋行を経て明治維新を迎え、近代主権国家日本の建設を求めて執筆をつづけたオピニオンリーダーが福澤諭吉である。明治8年、40歳の福澤が知力の限りを尽くして仕上げた著作が『文明論之概略』である。その第1章が「議論の本位を定る事」である。

次代の日本をどう築くか

「利害得失」「軽重是非」の判断は難しいが、一身の利害から国家のことを断じたり、眼前の「不便」で将来を論じたりしてはならず、「多く古今の論説を聞き、博く世界の事情を知り、虚心平氣以て至善の止まる所を明にし、千百の妨碍を犯して世論に束縛せらるることなく、高尚の地位を占めて前代を顧み、活眼を開いて後世を先見せざるべからず」。こうして定まった「本位」でなければ議論すべき価値はないという。

現在の日本の政界、ジャーナリズム、アカデミズムに巣喰うオピニオンリーダーの怪しさを言い当てているかのようである。安保法制や特定秘密保護法に対する大半のジャーナリズムや野党の反感情は、

ポピュリズムであると同時に、今なお残る、いや冷戦終焉後ますます増長する日本の左翼リベラリズムの「条件反射」なのであろう。

「利害得失」「軽重是非」の判断が聞かされることはまずない。

安保法制といえは「戦争法案」、特定秘密保護法といえは国民の「知る権利」の侵害だと応じるのみ、理性的で誠実な反対理由が説かれることはない。

現代日本における議論の本位は何か。アジア太平洋秩序の巨大な政治変動の中で日本の立ち位置をどう設定するかに他ならない。

中国の異常な海外膨張、米国の覇権力の相対的低下というパワーバランスの変化を見据え、次代の日本をどう築くか、これが議論の本位である。それに向けての懸命の論戦なくしては日本の民主主義はただの「洞」である。私が恐れているのは今の日本を覆いつつある政治的ニヒリズムである。

正論



拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫

最高のモラルはナショナリズム

左派と右派が少数化し先鋭化する一方、無関心層が大きな広がりを見せている。中国と朝鮮半島が日本に強硬で挑発的な外交・軍事的行動を取る一方、日本では憲法前文や第9条2項の問題が国民の前にまともな提起されないうまま歳月だけが空しく流れている。ニヒリズムの蔓延は避けようがない。

『文明論之概略』といえは、日本の文明化をいかに進めるかを説いて、日本の「文明開化」の必要

性を諄々と論じた名作だというのが広く流布されているイメージであらうが、それはこの著作をそのように読み込みたい左翼リベラリストの誤読か、おそらくは曲解のゆえであらう。書名に感嘆されてはならない。『文明論之概略』ではなく『独立論之概略』がそのエッセンスであり、議論の本位は「独立」、つまり「国の独立は文明なり」なのである。

文明化という観点からみれば欧米列強が日本に先んじているのは確かだが、彼らが文明といえるような段階に届いているとは到底いえない。相互間で獣のように振る舞い、アジアへの侵略と植民地化で激しく競い合う「群雄割拠」が列強の文明の現段階である。ならば、日本のみが高尚なる文明を求めようとしてもそんなことが可能にはなれない。日本という国家の独立の成否こそが戦われるべき議論の本位である。

それゆえ福澤は、日本もまた群雄割拠の時代の士族社会を律していた徳目を、「外国交際」(外交)における「報徳の徳義」として重んじなければ国家の独立は保持できないと説く。福澤は本書によってナショナリズムを最高のモラルとして国民に切々と訴える。議論の本位を日本の独立に求めずして何の文明論か、と往時の日本の思潮に警告を発したのである。

新しい『文明論之概略』出でよ。アジア太平洋の戦後環境の変動を直視する勇気をもて、東西冷戦時代の遠い過去に採用した憲法解釈に唯々諸々というのであれは、日本の独立はやがて危殆に瀕する。この期にあって野党5党が安保法制の廃止法案を提出した。そこまでの定見の低さか。米中覇権の罅縫い合いに日本が無縁でいられるとでもいうのか。

(わたなべ としお)